

☆“時間厳守・準備・覚悟・責任”——野林大樹監督が語る、野球と人生の真実

「負けず嫌いの 野球人生」



喘息とてんかんを抱えた少年が
プロ野球へ、そして指導者の道へ

取材・文＝岡 邦行

体の弱かった少年時代を過ごしながらも野球に出会い、近鉄2位でプロ入り。広島やヤクルトでもユニフォームを着て11年間の現役生活を続けた野林大樹さん。引退後は大学や社会人、さらには海外での普及活動に携わり、今年夏から日本ウェルネス宮城高の監督として新たな挑戦を始めた。歩みの根底にあるのは、野球を通じて人を育てるといふ揺るがぬ信念である。

宮城県仙台市。JR仙台駅から仙石東北ライン快速に乗れば、40分ほどで陸前小野駅に着く。その駅前から徒歩で約25分。宮城県東松島市小野字裏に2020年春に開校した全日制の「日本ウェルネス宮城高等学校（学校法人タイケン学園グループ）」は位置し、総合コースとともに野球部員が在籍するスポーツコース（男女硬式野球部の他に男子サッカー部、女子バレーボール部、男女バスケットボール部）がある。学校案内のカラー刷りパンフレットのスポーツコースのページには、次のように記されていた。

「これからのスポーツの多様性から、アスリートの競技力や身体的育成はもとより、共生社会の意義を認識できるライフスキル教育を積極的に取り入れたコース。男女寮を完備しており、生活面からサポートします。」

9月初旬の終日小雨降る日だった。校舎1階の校長室の応接間。男子硬式野球部監督の野林大樹さんは、私を直視しつづかった。

「今年3月31日に2年間ほどお世話になった上武大学（群馬）のコーチを辞めてね。もう野球界から引退しよう、そう考えていたら5月の連休明けだった。学校法人タイケン学園の副理事長からこの監督を引き受けて欲しいと。高校野球の指導者に就くのは初めて

だったんだが、3、4回お会いしているうちに『よし、やろうじゃないか！』と決心した次第です。

そこで夏の県大会で仙台商業高に負けした後、前任の監督さんが退任した後の7月半ばです。ここに来て、監督に就任した。そういつた経緯ですね。3年生部員が引退し、新チームになった部員を前にしたときは、『当たり前前（の）ことを、当たり前前（の）やろうじゃないか』と言った。とにかく、あらためて野球ができる環境を整え、しっかりと土台作りをしなればならない。全日制ですから単に野球だけをやって、チームが強くなればいってことではないです」

私は頷いた。間を置き、身長181センチ、体重80キログラムの恵まれた体格の野林さんは、真顔で続けて語る。

「友人や知り合いの野球関係者、もう皆さんから『ババは、もう野球から離れられないよ……』と言われた。たしかに小3の9歳のときでした。初めてユニフォームを着てね。ボールとバットを握り、グラブをはめた。あれから40年以上も野球と向き合っている。ドラフトで指名されてプロになり、11年間もプレーできた。今もユニフォーム姿で指導している。

ホント、この体を見ると信じてもらえない

かもしれないが、小3で野球を始める前の頃は、虚弱な子どもでね。喘息の上にテンカン持ち。朝礼では決まってぶっ倒れてしまう。ブルで泳ぐなんてとんでもない。1年間も通院し、その度に脳波の検査を受けていた……。両親や2人の姉、周りの人たちにとってはやっかいな子どもだったんじゃないかな。そんな調子で人生を歩んできたほうが、野球をしてきたお陰で一人前の人間になった。人生を振り返れば、いろいろあったね……」

* * *

この9月9日で56回の誕生日を迎えた野林さんは、1969年に東京都世田谷区で生まれた。すでに述べたように体の弱い子どもだった野林さん。野球を始めたのは9歳になる小

3のときだ。

「祖父が孫のぼくの将来を心配したんだろ。な。丈夫な体になって欲しいと願い、リトルリーグのテストを受けさせられた。リトルに入団することになって、それからですね。野球に夢中になり、毎日3、4キロは走り込んでいた。練習する場所は、巨人軍の多摩川グラウンドで、基礎的なことを繰り返し練習する。守備位置は、ずっとショート。中学、高校時代もショートでしたね」

私は尋ねた。野林さんの性格を端的に言えは？

「ぼくの性格ですか？ まあ、ひと言で、負けず嫌い。でしょうね。とにかく、常に『前進するのみ』と考えている。小6のときの身長は158センチだったが、日大三中に入学してリトルシニアで練習すると20センチほど

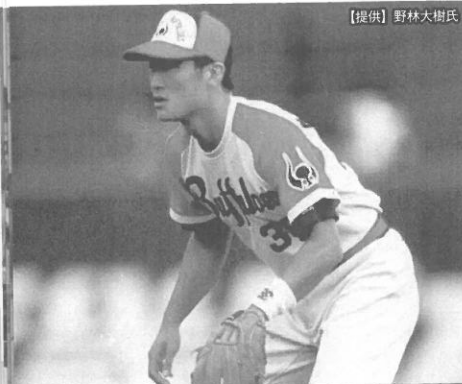
「負けず嫌いの野球人生」 喘息とてんかんを抱えた少年がプロ野球へ、そして指導者の道へ



【提供】野林大樹氏

野球を始めた少年時代の野林さん

「負けず嫌いの野球人生」
喘息とてんかんを抱えた少年がプロ野球へ、そして指導者の道へ



【提供】野林大樹氏



ドラフト2位で入団し、一度は広島にトレードされたものの、出戻り形となった近鉄時代の野林さん

位・柳田聖人(内野手・延岡工高)／4位・大道典良(外野手・明野高)／5位・吉永幸一郎(捕手・東海大工高)／6位・村田勝喜(投手・星稜高)

【ロッテ】1位・伊良部秀輝(投手・尽誠学園高)／2位・里見祐輔(投手・静岡市立高)／3位・堀幸一(内野手・海星高)／4位・小林茂生(投手・横芝敬愛高)／6位・大村巖(投手・東海大四高)

【近鉄】1位・高柳出己(投手・日本通運)／2位・野林大樹(内野手・日大三高)／4位・松久保新吾(外野手・愛工大名電高)／5位・長岡学(外野手・市川口高)

【巨人】1位・橋本清(投手・PL学園高)／2位・後藤孝次(内野手・中京高)／3位・磯貝公伸(投手・宮崎南高)／6位・杉山直

樹(捕手・沼津学園高)

【中日】1位・立浪和義(PL学園高)／2位・鎌仲政昭(投手・神戸高)／3位・上原晃(投手・沖縄水産高)／6位・高橋幸二(投手・盛岡工高)

【広島】1位・川島堅(投手・東亜学園高)／2位・石貫宏臣(投手・西日本短大付高)／3位・北原喜久男(投手・碧南工高)／4位・水沢英樹(投手・秋田経法大付高)／5位・塚原善之(投手・西城陽高)／6位・芦沢公一(投手・葦崎工高)

【ヤクルト】1位・長嶋一茂(内野手・立教大)／2位・倅田幸也(投手・東農大二高)／3位・鈴木平(投手・東海大一高)／4位・池末和隆(投手・杵島商高)／6位・城友博(外野手・習志野高)

38年前を野林さんは、懐かしむように当時を振り返った。

「小、中時代は、巨人軍の多摩川グラウンドで練習し、高校時代は神宮球場での試合が多かった。そのためプロ野球は巨人とヤクルトしか知らなかった。だから、本音として東京のプロ球団に入団したかった。

高校3年の夏前には、東都の青山学院や六大学の明治大、法政大など。もちろん、日大三高とということで日大からも『入学して欲しい』と声を掛けていた。

しかし、ぼくの場合は、大学よりもプロ入りを希望していた。8月が過ぎて9月になると、いろいろな話が聞こえてくる。プ

伸びて体重も増えた。帽子を深く被っていたために仲間からは、何故か『ペンギン』と呼ばれましたね。

リトルシニアのチームは弱かったけど、13歳のときに地区連盟の審判推薦でハワイ遠征のメンバーに選ばれた。シートバッティングでいい打球を飛ばしていたからですかね。ハワイではまったく打てずにダメだったけど、ぼくは3番打者。大久保秀昭さん(元近鉄・元慶應義塾大監督ほか)が4番打者だった……。

日大三中に通いリトルシニアで野球をしていた中学時代を思い起こせば、帝京高の前田(三夫)監督が『帝京で甲子園を目指そう!』と言ってスカウトに来たこともあった。日大三中を卒業したばかりの3月かな。その時点でまだ入学してもいないのに日大三高の4番を打っていたよね。

でも、入学した1985年の夏に甲子園出場を決めたんだが(1回戦で鳥取西高に4対7で敗退)、いくら打って守っても1年生のためにベンチ入りのメンバーには選ばれなかった。結局、日大三高時代のぼくは、甲子園出場は果たせなかったね。2年夏の西東京大会では、準決勝で東亜学園のエース・川島堅(元広島)を打つことができなかったし、3年の夏も決勝で川島に完封負け。悔しかった

1987年秋に行われた第23回ドラフト会議。阪急を除く11球団が6位まで指名を行い、計70選手がプロの門を叩くこととなった。日大三高の野林さんは、近鉄から2位指名された。この年の12球団の1位・2位指名選手と指名された高校生選手は、次の通り――。

【西武】1位・鈴木健(内野手・浦和学院高)／2位・上田浩明(内野手・北陽高)／3位・加世田美智久(投手・都城高)／6位・上中

「高3春のセンバツ甲子園で優勝したPL学園のショート・立浪(和義)のプレーをテレビで見ても、『いい選手だなあ』と思った。ぼく自身も高3のときに東京都選抜チームに選ばれてね。練習のときは、よく関東一高のキャッチャー、三輪(隆)後にオリックス入団)と遠投をして肩の強さを競っていたね。当時は遠投で120メートルは投げていた。だから、(4歳年下の)イチロ

ーが出てきたときは別に驚かなかった……」



7月半ばから日本ウェルネス宮城高の監督に就任した野林大樹さん

吉成(外野手・泉州高)

【阪急】1位・伊藤敦規(投手・熊谷組)／2位・山内嘉弘(投手・近畿大)／3位・八木政義(投手・銚子商)

【日本ハム】1位・武田一浩(投手・明治大)／2位・小川浩一(内野手・日本鋼管福山)／3位・藤島誠剛(内野手・岩陽高)／4位・五十嵐明(投手・平工高)／5位・平良吉照(捕手・八重山高)／6位・芝草宇宙(投手・帝京高)

【南海】1位・吉田豊彦(投手・本田技研熊本)／2位・若井基安(内野手・日本石油)／3

「負けず嫌いの野球人生」

喘息とてんかんを抱えた少年がプロ野球へ、そして指導者の道へ



「1軍でやれる自信を持ったのも2年目だったが、同時に1軍選手の凄さを知った。春の宮崎キャンプの際、巨人とオープン戦をしたときだね。巨人の斎藤(雅樹)さん、横原(寛己)さん、桑田(真澄)さんたちの投球を見て、思わず「何なの、これは?」と。まだキ

視線を上に向けつつ、野林さんはこうも言った。ハビリに励んだ。結果、1年でカムバックできたんだが、半年後には広島にトレード

「1991年5月。野林さんは、プロ入り4年目のシーズン中に清川栄治との交換トレードで広島に移籍。6月から7試合に二塁手、三塁手、一塁手として先発出場を果たした。だが、その後は出場機会に恵まれません、1993年6月に金銭トレードで近鉄に復帰している。広島での通算成績は21試合に出場し、37打数5安打、打率1割3分5厘だった。近鉄復帰後の野林さんは、1995年には5試合に先発するが、1997年に自由契約となり、テスト入団でヤクルトに移籍する。しかし、ヤクルト2年目の1998年で現役を引退したのだ。

「ケガが多いために試合に出られない。広島時代に小早川(毅彦)さんに言われたよ。『登録名を変えれば……』と。そこで占師を紹介していたが、本名の大樹(ひろき)と同じ読み、広起」としたが、結果的に成績には結びつかなかったよね」

ちなみに近鉄に復帰した際は、やはり同じ読みの「大氣」とし、最後のプロ球団となるヤクルトを引退するまで登録名として使用し



再び日本ウエルネス宮城高等学校の校舎1階の校長室の応接間――。

すでにインタビュ―開始から1時間を過ぎようとしているが、野林さんの話は終わらない。ときおり私が持参した資料を手に話を続ける。

「人様に誇れる成績は残せなかったが、プロ野球選手として近鉄から広島、広島から再び



【提供】野林大樹氏
現役引退後、生保の営業マンを経て、アマチュアの指導者となった

口球団のスカウトの人たちの話を聞くと、多くの指名順位は4位くらいだったんだが、9月過ぎると3位以内で指名したいという、そんな声も聞こえてきた。何とヤクルトの場合は、立教大の長嶋一茂さんを1位指名できなかったときはばくを指名すると言ってきた

「2年目は絶対に1軍で活躍したい」と、そういう想いで頭ん中はいっぱいだった。以上話の話を、私は思わず頷いた。懐かし

た。* * * * *

ところが、練習中に右膝の半月板損傷というが断裂の大ケガ。ドクターに「復帰までに1年半はかかる」と診察された。不運というか……。それからは、トレーナーと一緒にリ

結果として近鉄に2位指名で入団したんですが、本首を言えば「何で?」でした。やはり、生まれも育ちも東京ですからね。でも、当時の近鉄はドラフト前に仰木(彬)さんを監督に迎えて、かなり雰囲気よかったですね」

こうして野林さんは、1988年に近鉄に入団。夢に見たプロ野球人生をスタートさせたのだ。

高卒18歳の新人野手。中日1位指名の立浪和義だけは開幕戦からベンチ入りを果たし、活躍するのに新人王を手中にすることに。だが、多くの高卒新人は2軍スタートで、野林さんも同じだった。

「とにかく、デビュー当時の自分の頭ん中は『早く1軍に上がりたい。打ちたい』の想いでいっぱい、結果として1年目はジュニアオールスター戦に選ばれた。スタートとしては、まあまあですね。

それに1年目の1988年のシーズンは、例の10・19もあり、パ・リーグ優勝を逃したものの近鉄は盛り上がりつつあった。ぼくとしては『2年目は絶対に1軍で活躍したい』、そういう想いで頭ん中はいっぱいだった」

た。10・19――。まさに37年前だ。メディアが「最高の試合」「名勝負・名場面」と評したあのロケットとのダブルヘッダーに連勝すれば、パ・リーグ制覇。結果は、1勝1分。惜しくも仰木監督が率いる近鉄は、僅差でパ・リーグ優勝を西武に譲ったものの、たしかに盛り上がりつつあった。

あの10・19のシーズンにプロ入りしていた野林さんは、2年目の1989年には1軍入り。初出場は4月9日の藤井寺球場での対オリックス戦で、8回表に三塁手として出場している。初打席は3日後の4月12日の大阪スタジアムでのダイエー戦で、9回裏に栗橋茂の代打で出場。吉田豊彦の前に三振を喫した。その後は出場機会に恵まれなかった。何故なのか? 遠い日を語る。

「2年目のシーズンは、宮崎でのキャンプ前のサイパンキャンプから1軍入りし、開幕戦からベンチ入り。20歳前のぼくとしては、それなりにやれる自信があった。先輩には『ノバ』と呼ばれ、それなりに認められていたしね。

ところが、練習中に右膝の半月板損傷というが断裂の大ケガ。ドクターに「復帰までに1年半はかかる」と診察された。不運というか……。それからは、トレーナーと一緒にリ

「負けず嫌いの野球人生」

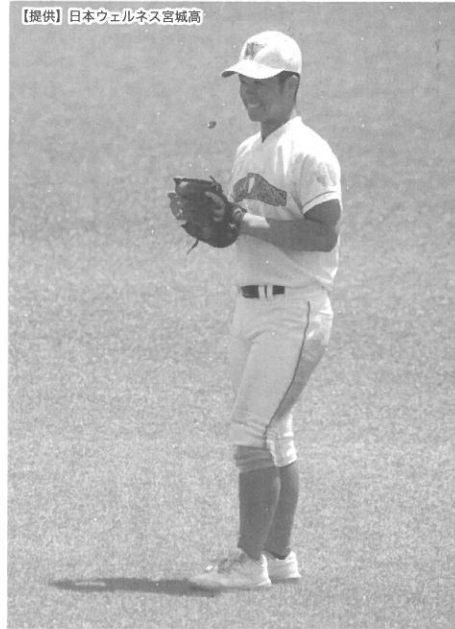
喘息とてんかんを抱えた少年がプロ野球へ、そして指導者の道へ



【提供】日本ウェルネス宮城高

が入ってくるようになった……」
さらに2019年には社会人野球に転身。JPAセット証券の監督に就任。2022年シーズン終了まで務めた。野球一筋の人生を歩んでいるのだ。
「ぼくは、野球の指導者としては運がいいほうじゃないかな。駿河台大学を辞めた後は、再び野中さんと呼ばれてスリランカに出向いてね。現地人に野球を指導し、帰国したらJ

近鉄。最後はヤクルトのユニフォームを着て、11年間もプロ生活を送ることができた。悔いは一切ないし、得たものはいっぱいあるね。
感じたのは、プロの世界って野球だけじゃなければいいわけじゃない。先輩・後輩の上下関係もあるし、いろんな人間がいる。可愛がられる選手もいるし、怒られて成長する者もいる。
観戦してくれるファンを感動させる仕事だしね。ナイターの試合のときでも1軍選手は、昼の12時には球場入りし、準備を怠らない。時間厳守で、準備をし、覚悟を決める。そして、責任を持って試合に臨む。これはプロに限らず、アマチュア選手にとっても重要な要素だね」
私は頭の中で野林さんの言葉を繰り返して



【提供】日本ウェルネス宮城高

た。時間厳守・準備・覚悟・責任を持って試合に臨む……。

ともあれ、現役引退後の野林さんは、日大三高の先輩でもあった当時のヤクルト球団社長・田口周氏の紹介でソニー生命の営業マンとなり、野球と距離をおいた業種に転職。ソニー生命退職後は飲食店を営む。

だが、やはり野球から離れることはできなかった。根っからの野球人だった。

「日大三高の大先輩の野中寿人さん。インドネシアやスリランカ、ドバイなどの代表チームの監督をしている人物だね。野中さんに呼ばれてインドネシアで2年ほど日本とインドネシアを往復し、指導したこともあるよね。現地の若者、男女関係なく「ベースボールをやるう!」と声を掛けては、教え込んでいた。それが指導者へのめり込むきっかけになったんじゃないかな。2010年に東都大学リーグ3部の成蹊大学のコーチになり、2年後に監督に就任した。選手を前に「勉強ができるんなら野球もできるはずだ!」なんて言ってるね。練習を終えると選手たちは、「やりき

Pアセット証券に声を掛けられた。その後は上武大学コーチになり、2年間お世話になった。

先ほども言ったが、仲間から「ノバは、もう野球から離れられない」と言われている。その通りだね。もちろん、今は飲食店の方はクローズし、野球のみの生活。いつまでやるかはわからないが、若い後継者を育てなくてはならない。

とにかく、悪いことは悪い。いいことはいい。ダメなことはダメ。それをはっきりと言える指導者になりたい」

そう語る野林さんに私は言った。喘息の上でテンカン持ち。朝礼では決まってぶっ倒れてしまう、プールにも入れないひ弱な少年だった野林さんは、プロになって引退後は指導者。野球の力というが、スポーツの力を痛感します……。

野林さんは、頷きつつ言った。「たしかにその通りですね。あらためてぼくの子ども時代を振り返れば、生まれたときの体重は4000グラムほどで、周りは驚いたという。でも、生まれて間もなく2階から落ちて左頭蓋骨を骨折し、死ぬと言われた。手術もできなくなつてね……。

まあ、今年84歳になるお袋が「小さいとき頭をぶつけたことで野球人になれたんじゃない



【提供】日本ウェルネス宮城高

りました!」と言って、いい表情を見せる。一生懸命に野球に取り組んでくれた」

2015年からは東京新大学リーグで2部暮らしを強いられていた駿河台大学のコーチに就任した。野林さんが続けて語る。

「1年間だけコーチをやった、2年目に監督代行になり、2部の春季リーグ戦で優勝し、初めて1部昇格を決めた。大学側も喜んでくれて、原っぱのようなグラウンドを人工芝の野球場にしてくれた。今の駿河台大学は1部に定着し、そのために全国の野球名門校の選手

いの。突然変異よ」と言って笑っていた。亡くなった親父は、水泳と陸上競技しかやらなかったし、親戚で野球をやっている者はいないしね。たしかに突然変異。まあ、性格は、ひと言で「負けず嫌い」。それで野球にのめり込んだ。野球の凄さ、力ですね」

終日小雨に見舞われた取材日だったため、午後1時45分からの練習は、体育館で行われた。1、2年生20人の部員が、ウオーミングアップし、素振りをして、ウエイトトレーニングをする。見守り、的確にアドバイスを監督の野林さん。

隣接する寮にも案内してくれた。階段もトイレもシャワールームも部員たちが掃除しているという。野林さんは言った。

「生活態度が悪ければ、いい選手にも信頼される人間にもなれない」

再び私は、野林大樹さんの言葉を頭の中で繰り返した。

時間厳守・準備・覚悟・責任を持って試合に臨む……。

岡邦行「おか・くにゆき」
1949(昭和24)年生まれ、福島県出身。法政大学社会学部卒。ルポライター。スポーツを中心に取材執筆を展開。99年「野球に憑かれた男」で報知ドキュメント大賞受賞。書籍化。10月に「ザ・ボウリング」(ゆいばおと刊)が上梓される。